# 那覇市立教育研究所 所報

第１１号
令和４年２月４日発行
所長　宮里　寧

## 「指導案の見方」

暦の上では、節分や立春が「春」の訪れを告げる２月でありますが、まだまだ寒い日が続きます。感染症対策に引き続き努めていただくとともに、先生方におかれましても体調管理にご留意いただき、日々の教育活動に取り組んでいただければと思います。

さて、自分の授業を客観的に見る力をどのような視点や方法で鍛えているでしょうか。その方法のひとつに「指導案」があります。

### １，指導案とは何か

指導案とは、授業の設計図です。設計図が良ければ、必ず授業がうまくいくとは限りません。しかし、ずさんな設計図によって良い授業が実現されることもありません。たとえ、その１時間の授業が盛り上がったかのように見えても、学んだことが次の学習につながっていかなければ意味が無いからです。授業力のある教師であっても同様です。場当たり的な指導の限界がここにあります。それゆえに、授業をデザインする力を地道に身に付けていくことが必要です。そのための第一歩が指導案です。

指導案には、授業者の思い、授業への考え方、指導の方向性が盛り込まれています。したがって、自分以外の授業者がまとめた指導案は、自分の指導を振り返るとてもよい材料になります。内省的に比較読みを行えば、自分の授業デザインを適切に問い直すことができるようになります。

また、新学習指導要領の骨格をなす６つの軸を見ると、これまでにない新しい方針が示されたかのように見えます。しかし、よく見ると、一般的な指導案の構成と重なることに気付きます。すなわち、私たちがこれまでつくり続けてきた指導案は、規模の大小はあるにはせよ、骨格においては新学習指導要領と同じになるということです。

| 新学習指導要領の骨格をなす６つの軸 | 指導案の構成 |
|---|---|
| ①「何ができるようになるか」 | 単元や本時の目標 |
| ②「何を学ぶか」 | 単元や本時の教科内容 |
| ③「どのように学ぶか」 | 学習活動 |
| ④「子ども一人一人の発達をどのように支援するか」 | 教師の指導の手立てや支援 |
| ⑤「何が身に付いたか」 | 学習評価 |
| ⑥「実施するために何が必要か」 | 学習環境（ノート・板書・ICT機器）や人材など整えるべき条件 |

### ２，単元や本時の「目標」の読み取り　－①「何ができるようになるか」－

「目標」が明解であれば、授業者が子供たちをどこへ連れて行こうとしているのかがひと目で分かります。

目標の読み取りの着眼点は、「〇〇を『通して』、□□する」というつなぎのキーワードです。「〇〇」は手段（言語活動や主体的・対話的で深い学びの視点などの活用）であり、「□□」は目指すべき到達点（資質・能力の３つの柱の実現）です。つまり、指導案を見たとき、「～を通して」という様式で目標が書かれていれば、手段と目的の組み合わせと授業者が目指す授業の方向性をつかむことができます。

つなぎのキーワード(例)
「～によって」
「～することにより」
「～して」
「～に基づいて」　など

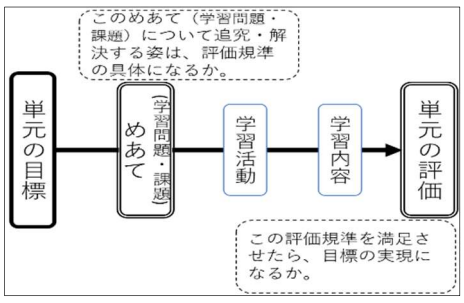
### ３，「目標」と「めあて」との関係を読み取る　－①「何ができるようになるか」－

見落としていけないのは、次の２点です。この２つが備わっていれば、目標を正しく設定できていると判断できます。

**① 設定された「めあて（学習問題・課題）」が、その「目標」を実現するための問いになっているか。**

**② 設定された「めあて（学習問題・課題）」を追究することで、その「目標」を実現できるようになっているか。**

もちろん、それは、右図のように、目標を子供の具体的な学びの形にして表現する評価規準に照らして検討することが欠かせません。いずれにしても、目標とめあて（学習問題・課題）を関連付けて見れば、単元や本時でどのような資質・能力を育成するのか、授業者が目指している真のねらいが分かります。




ここまでを把握した上で、これから自分が参観する授業は「何をよりどころとし」「どこへ向かおうとしているのか」「そのためにどのような手段を講じるのか」を自分なりにイメージしておきます。授業者の授業を参観する前に、授業のイメージ化（シミュレーション）を図っておくことはとても大切です。そうすれば授業後に、自分の描いたイメージと比較ができ、これまでの自分の指導にはなかった新たな発見を見いだすことができます。

### ４，単元や本時の「教科内容」を読み取る　－②「何を学ぶか」－

＊教科内容＝学習指導要領に示された各教科の内容

「『教科内容』を読み取る」とは、授業で子供たちに「『何を』理解させる授業なのか」をつかむということです。

この「何を」というときに、混同しやすいのが「教材内容」と「教科内容」です。「教材内容」とは、子供の前に示す「素材」です。「素材」の特徴や使い方を知らなければ、いかなる子供も学習することはできません。したがって、「教材内容」そのものの理解は必要です。しかし、「教材内容」を子供たちが理解できたからといって、この「何を」を学ばせたことにはなりません。なぜなら、学びの対象は、あくまでも「教科内容」だからです。

指導案における「教科内容」の示し方は、「予想される子供の反応例」となります。

「予想される子供の反応例」は、子供が「教科内容」を具体的に捉えたときの反応を、教師が事前に予想して記述するものです。もしこの「反応例」が書かれていないと、子供に理解を求める「教科内容」の具体が見えにくくなります。

### ５，「学習活動」を読み取る　－③「どのように学ぶか」－

「学習活動」を読み取るとは、「どのような活動を通して、子供に『教科内容』を習得させ、『目標』を実現させようとしているか」を見るということです。教師が教えるべき「内容」や育成を目指す「資質・能力」を、子供自らが身に付けられるように仕向けていくのが「学習活動」です。

「学習活動」については、指導案において「～を調べる」「～について話し合う」「～をまとめる」などの「文末表現」を使って書かれることが多いと思います。一方、「～について知る」「～ついて考える」中には「考え合う」といった「文末表現」も見受けられます。「知る」も「考える」も「頭の働き」であって「活動」ではないため、「学習活動」を示すことになりません。

「学習活動」に関わる記述で注意したいのは、「活動を表す言葉」の「前後」に「何が書かれているか」ということです。次のような文脈として読み取れるようになっていれば、「学習活動」の具体が示されていると判断することができます。

(例)【話し合う】　「Ａについて話し合い、Ｂを考える」といったように、「Ａ　話し合うテーマや論題」と「Ｂ　考察する対象」の間に「話し合う」が差し挟まれている。

### ６，教師の指導の「手立て」や「支援策」を読み取る　－④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」－

指導の手立てには、発問や助言、指示、資料提示（提供）、板書やワークシート、ICT の活用、学習形態の工夫など様々な事柄が考えられます。それらの手立てを指導案に的確に記述する際には、「その学習展開にはどのような手立てが本当に必要なのか」を精査することが大切です。

ポイントは、「させる」という使役の助動詞から「できるようにする」に置き換えることです。そうすると、「できるようにする」の前の部分に「どのようにして」を置かないと意味をなさない文章になります。すなわち、明瞭で適切な指導の手立てを書かざるを得なくなるということです。

(例)【調べさせる】　「複数の資料を用意して選べるようにし、子供が自分の疑問について主体的に『調べることができるようにする。』」

以上のように、授業者の指導案の構造や内容をつかんだうえで授業を参観するだけでも、授業者の授業デザイン力と授業マネジメント力を見取ることができます。大切なことは、参観者である先生方自身が、自らの授業を見る目をしっかり養うことです。授業を見る目は、他者の授業を批判する目であり、同時に自分自身の授業を批判する目でもあります。

いわば、合わせ鏡のように、自分の授業の指導案を見直す力です。授業を見る力は、授業を行う自分自身の後ろ姿（現状）を克明にしてくれるでしょう。

## 研修　２・３月の教育研究所事業予定

２/２(水)　中堅研⑬・閉講式〈オンライン〉
２/９(水)　２年研〈オンライン〉
２/10(木)　初任研　閉講式〈オンライン〉
３/16(水)～　次年度初任研に係る時間割説明会〈オンデマンド〉
３/28(月)　第 117 期研究員修了式〈研究所〉

## お知らせ

【ICT 活用に関する那覇市教員支援サイト】
【那覇市 ICT 教育推進部会　実践事例サイト】
上記サイトのご活用をお願いします。
教育研究所 Web ページトップにリンク先掲載。